

## [課程一2]

### 審査の結果の要旨

氏名 栗原 雄樹

本研究は、経営学的評価手法である Data Envelopment Analysis（以下、DEA）を用いて日本全国の訪問看護事業所の効率性を測定し、その関連要因の特定したもので、下記の結果を得ている。

1. DEA を用いて訪問看護事業所の効率性を測定する際の産出変数を、介護報酬・診療報酬点数としたモデル、およびデータの入手が容易な産出変数を訪問回数としたモデルの 2 つを作成した。それぞれのモデルで事業所の効率性を示す、D 効率値を算出した結果、2 つのモデル間の D 効率値の相関係数は 0.80-0.88、差の絶対値は 0.08-0.09 であった。先行研究との比較から、2 つのモデル間の効率性測定の結果が同程度であると判断し、入手が容易な訪問回数を産出変数として測定した効率性の妥当性を確認した。
2. 日本全国の訪問看護事業所を対象に D 効率値を算出し、適正な事業所規模、および効率性の関連要因を特定した。その結果、規模の規模を拡大することで、効率性が向上する余地が大きい事業所は、訪問可能な職員（常勤換算数）が 3.0 人未満の事業所に多く、事業所の規模を縮小することで効率性が向上する余地が大きい事業所は、職員数が 10 人以上の事業所に多かった。また、事業所の効率性の高さに関連している要因は、事業所が事務職員を雇用していること、事業所が立地している市区町村の人口密度・高齢化率・可住地面積割合が高いことであった。

以上、本論文は、訪問看護事業所を対象とし、DEA という経営学的な評価手法を用いて、効率性を測定した初めての報告である。公表されているデータソースから入手しやすい変数を用いて、訪問看護事業所の効率性を測定する方法を示し、また、事業所の効率性には、事業所の職員構成、および事業所の立地市区町村の人口特性・地理的要因が関連することを明らかにした。本研究は、訪問看護事業所の効率性を測定し、従来の訪問看護の質を評価する指標と組み合わせることで、今後増加していく訪問看護の需要に対応しうる、より良質で、なおかつ効率的な訪問看護サービス提供体制の構築に貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。